



第1回 COE国際シンポジウム 開催レポート

セッション 記号と写実 19世紀後半メディアがもたらした衝撃

シンポジウム・プレシンポジウムのテーマは、19世紀後半、つまり、日本の開国から江戸時代の終焉、近代国家の出発という政治的、社会的変動期に、写真という未知のメディアがもたらされたことで、既存のメディアはどのような影響を受け、変容していくのか、技術と流通形態の問題を視野に入れ、版画と写真を軸にその変容のプロセスをみようとするものであった。わずか半世紀とはいえ、変動の激しいこの時期を一つに括ることは問題を封じ込めてしまう危険があるので、19世紀後半の前期を「記号と写実 19世紀後半メディアがもたらした衝撃」、後期を「版画と写真 19世紀後半 出来事とイメージの創出」とに時期的に区分して論じた。

原信田實氏(国際浮世絵学会会員)は、「見えない都市 出来事を語る錦絵」で浮世絵版画『名所江戸百景』が実は安政2年(1855)10月2日に江戸を襲った地震を読み込んだ版画メディアであったという新しい説を披露した。これは、浮世絵版画が専ら芸術、あるいは美術史の観点から解説され、現代とは異なり民衆の安価な楽しみであった当時のあり方から考えれば、当然行き着く考え方であったはずである。しかし、これまで、地震との関係において読み込まれてこなかったということは、それほどに社会の通念とは、時代の支配的価値観に左右されるものだけということを示した。

セバスチャン・ドブソン氏(写真歴史家)は、「写真による日本に対しての眼差しの形成」と題し、横浜写真といわれる、開港後の横浜で販売された写真を手広く手掛けたベアトをはじめとする外国人写真家が、カメラのレンズを通して日本人をどのようにみていたのか、また、パリやアメリカでは日本人を撮影した写真家はどのよう

に日本人をみていたのかなど、主として撮影対象とされた日本人イメージの推移を論じ、作られた日本人像が外国に広まる実際の過程を論じた。

コンスタンチン・グーバー氏(ロシア海軍博物館チーフアーチスト)は、「船乗り・画家・発明家 アレクサンドル・モジャイスキーの芸術的・科学的遺産」のテーマで、1854年下田で開始された日露外交交渉のロシア側代表プチャーチンに随伴して来日した海軍士官モジャイスキーの事歴を紹介された。日本では、専らモジャイスキーはプチャーチンが伴った絵描きとして認識されてきたが、ロシアでは画家としてよりも、むしろ、ロシア最初の航空機設計者として著名であることなど興味深い事実を披露した。また、興味深いことには、ロシアでは下田でロシア使節団が日本人を撮影したとする記録は見当たらず、そうした見地からの研究もないとのことなどを明らかにした。

コメンテーターとして美術史家の渡辺俊夫氏(ロンドン芸術大学トランスナショナル・アート研究所教授)は、日本人のイメージが何世紀も前に描かれた日本人像に基づいて描かれると、それが是正されずに踏襲され、外国における日本人像が形成されていくことを実際の絵を提示しつつ論評した。つまり、写真に表出される日本人とは異なる描かれた日本人像が固定観念化していくプロセスを示した。

金子隆一氏(東京都写真美術館学芸課専門調査員)はコメントで、横浜写真で活躍する外国人の写真技術を日本人はどのように学んだのか、技術の伝授、相互の交流の実態をさらに詳しく調査する必要性を指摘した。(北原)

セッション 身体技法と祭祀芸能 祭祀者の動きと人形の動きから

本セッションでは、芸能に於いて身体表現が伝達しようとする心情・事柄と動作との間に共通性があるかどうかという疑問から出発し、中国の祭祀の場で演じられる祭祀者の動きに、そして韓国のもともと祭祀の場で演じられ芸能化してきた民俗芸能の動きの中から、さらに本来宗教色を帯びていたと考えられる人形の動きから、身体技法の特徴を捉える事で、人類文化の記憶を探ろうと試みた。

中国のヤオ族祭祀者の動きを張勁松氏(湖南省民間文芸家協会副主席)が扱い、「中国瑶族の祭祀者の身体技法」のテーマで話された。祭祀者の舞いは神を迎え、神を喜ばせ、神を送る目的をもち、時計と逆順の回転を組み合わせまた五方を意識している。マジカルなステップからは踏みしめる大地志向がある事が確かめられ、また神霊を招へいし、使役し、悪霊を除く事を目的としたマジカルな指と手を組み合わせた手訣を描く等があるとされた。